

六、世界が知っていたこと

南京大虐殺について、世界は闇の中にいたわけではない。事件が展開するにつれ、大虐殺のニュースは絶え間なく世界中の人々に送り届けられた。南京陥落直前の数ヶ月間、首都南京には多数の外国特派員が住んでいて、日本軍の飛行機による空襲を報告していた。一二月初めに日本軍が運命の首都に接近すると、記者たちは戦闘、放火、最後の瞬間の撤退、そして国際安全区委員会の創設などの生々しい記事を毎日のように送りつづけた。驚くべきことだが、大虐殺が始まったばかりの頃、日本の新聞は、駆り集められて処刑されようとしている中国人たちや、河岸で処分される前の死体の山の写真、日本兵の間で行われている殺人競争、またはそれ以上にショッキングな記者自身による説明を掲載していた。

明らかに、国際世論の抗議を受ける前の数日間の虐殺行為は日本政府の強烈な誇りの源だった。南京陥落のニュースが伝わったときには、日本中の人々の間で祝勝会が催された。東京では南京そばの祝勝料理が振舞われ、夕方には日本中の子どもたちが提灯行列で行進し、日の昇る国の勝利を祝った。日本政府が慌てて自分の軍隊の所業を隠蔽し、ニュースをプロパガンダに変えるようになったのは後のことであり、パネー号の沈没のニュースと南京市民の虐殺行為が国際的に非難されてからだった。数人のア

メリカ人ジャーナリストの努力によって、日本は国家としての大きなスキャンダルに直面することになった。

アメリカのジャーナリスト

その時に西欧諸国の世論に決定的な影響力をもったのは、ニューヨーク・タイムズのフランク・ティルマン・ダーディン、シカゴ・デイリー・ニューズのアーチボルド・ステイール、そしてAP通信のC・イエイツ・マクダニエルの三人のアメリカ人外国特派員だった。彼ら三人の足跡は、いずれも冒険の色彩を帯びたものである。ヒューストンから来た二九歳の記者だったダーディンはアメリカから中国までの旅費を無料にしてもらうために、貨物船で甲板をモップで拭きウインチの掃除をしていた。上海に着くと、彼は日刊の英字新聞で仕事をし、やがて日中戦争を取材するためにニューヨーク・タイムズに移籍した。ステイールはもつと年上の特派員で、日本軍による満州の占領と拡大するアジアの戦争を報告していた。多分、三人の中で最も向こう見ずだったのはマクダニエルだろう。大虐殺の前に、彼は郊外の戦線を自動車で駆け巡り、「戦争の現場を探している」ときに、爆発した砲弾で危うく命を落とすところだった。

ダーディン、ステイール、そしてマクダニエルは大虐殺が始まった数日後には市を離れたが、南京にいた短い時間の中で巨大な衝撃を巻き起こした。彼らはアメリカ合衆国最大で、最も信頼されている新聞紙上に掲載される記事を書いただけでなく、多数の生命を救うために国際安全区委員会に参加した。

南京大虐殺は、新聞記者たちに中立的な観察者としての本来の役割を逸脱し、一個の参与者として戦

争のドラマに飛び込んでいくことを強いた。ときに、彼らは中国の民間人を日本の侵略者から護ろうとすることにより、自分自身の記事の主役になった。たとえば、C・イエイツ・マクダニエルはアメリカ大使館の中国人の召使を保護する役割を引き受けた。大虐殺の間、彼らの多くは非常に怯えていて、水を補給するときにさえ建物の外に出ることを拒んだ。そこで、マクダニエルは何時間もかけてバケツに井戸の水を汲み、それを大使館に運んで、召使たちに飲ませた。彼は行方知れずになった召使たちの親戚を探し（多くの場合、残っている死体を見つけ出した）、大使館に押し入ろうとする日本兵を追い出した。

記者たちは、明らかに、到底、助けることができない人々をも救おうとした。たとえそれが死ぬ間際の人たちを慰めるだけのことでもしかないとしてもである。大虐殺のとき、ダーデインは歩道に横たわっている中国兵に出会った。彼のあごは弾丸で撃ち碎かれ、身体からは出血していた。兵士は手を差し出し、ダーデインはそれを掴んで握った。数年後に、彼は回想している。「私は彼をどこに連れて行つたらいいのか、どうすればいいのか分からなかった。そこで私は、愚かにも、あることをしようと決めた。私は五ドル紙幣を彼の手に握らせた。もちろん、それは彼にとつて全く意味のないものだった。しかし、いづれにしても、どんなことであろうと、私は何かをしたいという衝動を感じていたのである。彼は辛うじて生きていた」。

一二月一五日に、ほとんどの記者たちは、彼らの記事を送るために、南京を去って上海に向かった。彼らの南京市最後の日は気味の悪いものだった。川岸に向かう途上で、記者たちの自動車は水門の下の文字通り数フィートにも重なる死体の上を通って進んだ。そのとき、すでに野犬が死体を貪り始めてい

た。その後、彼らが船の到着を待っているときに、日本軍が千人の中国人を並ばせ小集団に分けて跪かせ、一人ずつ後頭部を撃っているのを見た。処刑の間、一部の日本人は笑っていて、あるいは煙草を吸っていて、まるで豪華な見世物を大いに楽しんでいるかのようだった。

A P通信のマクダニエルは南京に一日長く滞在してから上海行きの駆逐艦に乗船した。二月一六日、中国の破滅した首都における最後の日に、彼はもつと多くの死体を見、腕を縛られている中国人の長い列の横を通った。中国人の一人が集団から離れて、跪き、マクダニエルに死から救ってくれるよう懇願した。マクダニエルは書いた。「私には何もできなかった。私の南京最後の記憶。死んだ中国人、死んだ中国人、死んだ中国人」。

映像ジャーナリスト

南京の近くには、自らの生命を危険にさらしてパネー号の爆撃を撮影した、アメリカの二人の映画ジャーナリストがいた。爆撃のとき、ユニバーサル映画のノーマン・アレイとフォックス・ムービー・トーンのエリック・メイエルは、たまたま艦に乗っていたので、上質の記録フィルムを得ることができた。彼らは攻撃から無傷で生還することができたが（アレイは爆撃と機関銃の掃射から逃れるときに、指にかすり傷を負い帽子に穴をあけられただけだった）、別のジャーナリストは彼ほど運がよくなかった。砲弾の破片は、アレイに続いてパネー号の階段を駆け上がっていたイタリア人記者サンドロ・サンドリの眼を背後から直撃し、わずか数時間後に彼は死んだ。

生き残ったパネー号の乗員と共に、川岸の葦の茂みに隠れていたとき、アレイは自分のフィルムとメ

イェルのフィルムを麻の布で包み、泥の下に埋めた。彼は日本軍が自分らを殺しに岸まで来ると思つたのである。その後、フィルムは無事に回収され、アメリカ合衆国に輸送され、事件を撮影したニュースフィルムは全国の映画館で上映された。

アメリカ合衆国では、パネー号の撃沈は南京で発生していた大規模な強姦と殺戮全体よりも大きな騒動を巻き起こした。一月一三日にフランクリン・D・ルーズベルト大統領は、爆撃に「衝撃を受けた」と語り、天皇裕仁に即刻の賠償を要求した。数日後に、消耗しきつた生存者たちがようやく文明社会にたどり着いたとき、大衆の反応はますます悪化した。汚れて寒さに震え、毛布と中国の掛け布団、ぼろぼろになつた衣服を身にまとつた生存者の中には、ショックで未だに死線をさまよつてゐる人もいた。彼らの話は、彼らの写真とともに、この国のすべての主要紙に、「一時間も続いた日本軍の攻撃にさらされたパネー号の被害者」とか、「南京における屠殺と略奪の統治」というような見出しで掲載された。アレイとメイェルのフィルムが劇場で上映されると、アメリカの観衆の間にさらなる激怒と反日感情を喚起するばかりだった。

日本の損害対策

外国特派員が南京を去つた瞬間に、日本人は市を封鎖して、他の記者が市内に入れないようにした。ジョージ・フィッチは、これが一月一五日に始まつたのを目撃している。その日、彼は外国特派員を自動車で川岸まで送り、彼らを上海行き砲艦に乗船させた。フィッチが下関から南京に向かつて自動車に戻るときに、城門で日本の歩哨が彼を停止させ、再入城を完全に拒絶した。上海から戻つてきて、

フィッチと同乗していた日本大使館員の岡村氏でさえも、その男を説得して通行を認めさせることができなかつた。「日本では大使館は軍に対しては何の役にも立たない」。最後に岡村は軍司令部に向かう自動車の一台をつかまえて、フィッチに対する特別な通行証を得なければならなかつた。

日本人がなんとか少数の外国人の市内への訪問を許可したとき、彼らは訪問者の動向を注意深く管理した。二月に、彼らは数人のアメリカ海軍士官が南京を訪れることを認めたが、日本大使館の自動車に乗り、日本大使館の担当者を同行させた上であつた。四月になると、日本の司令部の上層はほとんどの外国人に対して自由に市に入ることも市から出ることもできないようにした。

彼らの吐き気を催すような非道の詳細を隠蔽するために、日本人は外国の外交官が南京市に戻ることもまでも妨害した。しかし、最終的には、彼らは真実を覆い隠すことはできないことが明らかになつた。特に、ドイツ人とアメリカ人を欺くことはできなかつた。

南京大虐殺における外国情報機関

ヒトラーの政府は日本がものごとを遅延させる動機をすぐに理解した。「私が前の報告書で述べた、大虐殺の公的な証拠を作成できないようにするために、日本人が我々の帰還を遅らせているのだという想定は、正しいということが確認されました」。一月にドイツの外交官がベルリンに報告している。「当地にいるドイツ人やアメリカ人によれば、外国の外交官が南京に戻るといふ意図が明らかになるや否や、民間人、女性、子どもに対する無分別な大量殺戮の証拠を除去するための大がかりな清掃作業が行われたということです」。

アメリカ政府もまた、日本が覆い隠そうとしているものを知っていた。日本の国外機関の上層部の外交通信は暗号によって保護されていたが、一九三六年までにアメリカ陸軍信号情報部の暗号解読班が日本の暗号法を解読した。その、アメリカ人の間での通称は「RED」だった。この結果、南京大虐殺の時期には、アメリカの情報機関は東京の日本の指導者たちとワシントンDCの外交官たちとの秘密の通信を傍受して読むことができた。一九三七年一月二六日に、外務大臣廣田弘毅がワシントンの駐米大使斎藤博にある通信を送った。そこでは、アメリカ大使館のスタッフの動きを妨害して、彼らの早急な南京への帰還を阻止する必要があると強調されていた。通信はこのように読み取れる。「彼らが戻って、彼らの国籍をもつ人々から軍部の行為に対する好ましからざる報告を受け取り、そのような苦情を受けた外交官がその報告を彼らの母国に転送すれば、我々は極度に不利な位置に置かれることになるだろう。したがって、最大限、我々が取るべき最善の方策は、可能な限り彼らをここに留めておくことであると我々は信じている。それには多少の抵抗を感じるかもしれないが、この問題における破局の危険を冒すことよりは好ましいと信ずる」。

しかし、アメリカ政府はその時点で彼らが知っていたことを公表せず、結果的に日本が真実を隠蔽するために行っていた検閲に貢献することになった。たとえば、ユニバーサル映画のニュース映画製作者ノーマン・アレイは日本軍のパネー号攻撃を記録した五、三〇〇フィートの映画を撮影したが、映画を劇場で公開する前に、ルーズベルト大統領は三〇フィートほどのフィルムをカットするよう依頼した。その部分は、甲板すれすれに砲艦を爆撃し銃撃している日本軍の攻撃の場面だった。この三〇フィートは恐らくフィルム全体の中の最高の映像で、日本政府を最も強く糾弾している部分だったのだが、アレ

イは申し出に同意した。The Panay Incident (パネー号事件)の著者ハミルトン・ダーバイ・ペリーによれば、ルーズベルトは、攻撃が対象の確認を誤った結果によるもので意図的に行われたものではないという日本人の弁解を、信憑性のあるものにしたのだという。疑いもなく合衆国政府は、この爆撃について、日本との間での金銭的な補償と外交的な話合いによる和解に至ることを強く望んでいて、この三〇フィートはそのような和解を不可能にするだろうことを知っていたのである。

日本のプロバガンダ

日本人が公衆の意見に影響力を及ぼそうとする試みは、そのときに始まったものではなかった。南京大虐殺以前にも、アメリカの情報機関の人々は、有利な宣伝をアメリカで広めようとする、日本の「極秘」の計画を見ていた。また、日本政府は大きな予算を割いて、有力な新聞関係者に接触し、主要な新聞とラジオ局に広告を出し、パンフレットやチラシの宣伝文書を印刷していた。

しかし南京大虐殺で日本が直面した広報活動の破綻はとてつもなく巨大なもので、それでも彼らが事実を隠蔽しようとしたことは、今から見れば、ほとんど馬鹿げていたように思える。南京にいる自らの軍隊に規律を強制する方策を適用する代わりに、日本人は力を合わせ、彼らの使用できる手段を総動員して、プロバガンダの電撃作戦を発動した。それによって彼らは、世界史上最大の流血の惨事の一つについての詳細を、幾分でもぼかすことができなかつたと望んだのである。

日本のメディアは、まず、南京市ではすべてが良好であると主張した。一二月二〇日にロバート・ウィルソンは、日本の同盟通信社が、南京の人々は家に戻りつつあり、すべてが正常になったと報告してい

るのを聞いた。「それが南京から発せられるニュースのすべてならば、それは本当のニュースが露見したときの大きな破綻を準備するためのものだ」。ウィルソンは書いた。

次に、日本政府は注意深く準備した観光旅行を日本人の訪問者に許可した。一週間後に同盟通信は、日本人の観光客で混み合っている日本の商船が、上海から南京に到着したと伝えた。この訪問についてジョージ・フィッチは書いている。「注意深く、彼らは、現在では死体が片付けられている僅かな通りを案内されていた。彼らは優しそうに中国の子どもたちに菓子を渡し、恐怖で縮み上がっている子どもたちの頭をなでた」。フィッチは観察していた。日本の企業関係者の市の旅行団体は多数の婦人たちを伴っていて、彼らは「自分自身で大いに満足していて、また日本の素晴らしい勝利を喜んでいるようだった。しかし、もちろん、彼らは真実を聞いていない。世界もそれを聞いていないのだからと私は思う」。

一月には、日本の報道関係者が南京に来て、日本国内と世界中に配信するために、市内の写真を撮影した。その年の大晦日に、日本大使館は難民キャンプの中国人管理者を会合に呼び出し、翌日に市内で「自発的な」祝賀会を開催すると語った。中国人は数千の日本の国旗を製作し、日本兵を歓迎する南京住民の群集の様子を映画に撮影するために、旗を手にして行進するよう命令された。日本の写真家も南京に来て、日本の軍医の医療サービスを受け、日本兵に飴をもらう中国の子どもたちの写真を撮影した。「しかし、カメラが去ったときには、このような行為は繰り返されなかった」。ルイス・スマイスは友人への手紙で書いた。

日本のプロパガンダの最もいやらしい例は、上海で発行されていた日本支配下の新聞「新申報」に掲

載された一九三八年一月八日の記事である。「南京市の和氣藹々の雰囲気の中で喜びが広がる」という見出しの下で、記事は「皇軍が入城すると、銃剣を鞘に収め、診察と治療のために、その慈悲に満ちた手を差し伸べ」、南京の飢えて病んだ大衆に医療と食物を与えたと主張した。

皇軍への挨拶として老若男女がみな跪き、彼らの尊敬の念を表現した。……日章旗と赤十字の旗の下、兵士たちの周りに集まった多数の群集は、彼らの感謝の念を表すために「万岁」と叫んだ。……兵士たちと中国の子どもたちは幸福そうに一緒になって、楽しく滑り台で遊んだ。いや南京はすべての国が目にする最高の場所になった。ここでは、人は平和な住居と幸福な仕事の空気を吸うことができるのである。

見え透いた三文芝居で大虐殺を言い逃れようとする日本の試みは、残っていた宣教師たちを刺激し、その反応は日記の中での疑念に満ちた記述となった。ここに、いくつかの例がある。

ジェイムズ・マツカラムの一九三八年一月九日の日記から

日本人たちは安全区における我々の努力を貶めようとしている。彼らは憐れな中国人を威嚇し、脅迫して、我々が言ってきたことを拒絶させようとしている……一部の中国人は、略奪、強姦、そして放火を行ったのは日本人ではなくて中国人なのだということを証明する準備までしている。ときどき私は、狂人や白痴を相手にしてきたのではないかと感じる。そして、私たち外国人

すべてがこの試練を通して生き残ってきたことに驚嘆する。

ジョージ・フィッチの一九三八年一月一日の日記から

……上海で発行されている日本の新聞のいくつかを目にした。その中の二つは東京日日新聞だ。これらの新聞には、一二月二八日という早い時期に、商店が開かれ、業務は正常に戻り、日本人は我々と協力し合つて気の毒な難民に食料を与え、市からは中国人の略奪者が一掃され、今では平和と秩序が行き渡っているとある！ よろしい。事態がこれほど悲惨でなければ、笑いたくなるような話だ。これは、戦争がはじまつて以来、日本人が世界中に送つてきた嘘の典型だ。

リーダーズ・ダイジェストに掲載されたジョージ・フィッチの日記から

三月に、東京の国営ラジオ局がこの記事を世界中に発信した。「南京における多数の死と財産の破壊の責を負うべき不良集団が捕らえられ、処刑された。彼らは蒋介石の旅団の不平分子であつたことが判明した。現在では、すべてが平穩で、日本軍は三〇万人の難民に食料を供給している」。

ルイス・スマイスと彼の妻が一九三八年三月八日に書いた手紙から

日本の新聞の最新記事によると、一人の中国人の武装強盗団にすべての責任があつたことが分かつたという！ ほう、彼ら全員が何週間もの間、毎日、夜も昼も、百人から二百人ずつを強姦し、報告されている五万ドルを持ち去つたとするのならば、彼らはとてつもなく強力な中国人

だったわけだ……。

チラシは日本人のプロパガンダのもう一つの手段だった。大量処刑の間にも、日本軍は飛行機で空からチラシを投下して、南京の人々を宣伝情報漬けにしていた。たとえば、「家に戻った良い中国人は、食物と衣料を与えられる。日本は蒋介石の兵士の怪物にだまされない中国人の良い隣人になりたいと欲している」といった具合である。チラシには彩色した絵が描かれ、端麗な日本兵が中国人の子どもを腕に抱き（ある人は「キリストみたいだ」と評した）、中国人の母親が彼の足下で身を伏せて、一袋の米への感謝を示していた。ジョージ・フィッチによれば、チラシが投下された日には、何千もの中国人が難民キャンプを去り、破壊された家に戻ったという。

日本人はまた、悲劇が起こった家の付近に、鮮やかな極彩色のポスターを貼った。その一枚は、日本兵が小さな子どもを抱きかかえ、母親に一缶の米を与え、父親には砂糖やその他の食料を与えている図が描いてあった。ドイツ人の外交官の報告書はそのポスターについて描写している。「魅力的で、愛すべき兵士が手に調理用具を持ち、肩には中国の子どもを乗せ、貧しいが正直な中国の農民に両親は溢れんばかりの感謝の気持ちを含めて彼（兵士）を見つめている。家族は善良なおじさんと並んでいて幸せである」。絵の右上には説明書きがあった。「家に帰りなさい！我々は米を与える！日本軍を信頼しなさい。そうすれば救われます！」

同時に、日本人は大虐殺から注意をそらすために、盛大な歓迎会や広報式典を主催した。二月初めに、日本の将官が外国の外交官を南京の日本大使館での茶会に招待した。彼は、日本軍はその厳しい規律に

よって世界的に有名で、日露戦争や満州事変ではただ一度の規律違反も発生しなかったと自画自賛した。将官は言った。何らかの理由で日本軍が南京で非道を働いたとすれば、中国の人々が外国籍の人間に煽動されて抵抗したからだ。外国籍の人間とはもちろん安全区委員会を意味している。しかし、非常に奇妙なことに、同じ演説の中で前の言葉と矛盾して、将官は日本兵が南京への進軍のときに、食べられるものや使えるものを何も見つけられなかったので、その怒りのはけ口を人々に向けたということを認めた。

しかし、日本のメディア宣伝チームは、南京中を吹き荒れた放火、強姦、そして殺人について、外国の外交官社会を欺くことはできなかった。二月中旬に、日本人は上海で芸者や報道写真家も用意された軍楽隊の演奏会を開催した。しかし、ドイツの外交官は見ていた。お祭りの式典がもたれているときに、「一二歳の少女の母親は強姦しようとする兵士に少女を渡せと迫られ、それを拒否すると家を焼き払われた」。

安全区の指導者の反撃

国際安全区委員会は、プロパガンダの波状攻撃と戦うためにできることをすべて実施した。大虐殺の最初の数日間には、安全区の指導者は、フランク・ティルマン・ダーディン、アーチボルド・ステイール、そしてC・イエイツ・マクダニエルのようなアメリカの外国特派員の援助を受けることができた。しかし彼らが去った後、国際委員会はすべてを自分の力で行わなければならないようになった。日本政府はシカゴ・トリビューンのマックス・コッペンリングなどの他の記者が南京に入ることを禁止し、その結果、

日本兵の行状は、世界のメディアが彼らの行動を見ていないことを知って、さらに悪くなった。

だが、日本の政府は国際委員会のメンバーが自力で宣伝活動を展開する能力を過小評価していた。安全区の指導者に共通する一つの顕著な特徴は、言葉を駆使する技芸における高度な訓練を受けていたことである。ほとんど例外なく、彼らは雄弁な書き手であり話し手であった。宣教師たちは、アメリカやヨーロッパの最高の大学で教育を受け、成人してからは、ほとんどの月日を、説教を話し、文章を書き、キリスト教の講義をするという行為を献身的に行つて過ごしてきた。委員会の教授には、本を書いた人もいた。それ以上に、彼らはグループとしてメディアで働くことに洗練されていた。南京が陥落する遙か前から、彼らは南京のラジオ放送での講話を楽しんでいたし、人気のある出版物に中国に関する記事を書いていた。もうひとつ、宣教師たちは、日本人が考えもしなかった点で先んじていた。彼らは、全生涯をかけて地獄の真の意味を熟考していた。南京でそれを見つけたとき、彼らは一瞬も無駄にせず、それを世界の公衆に向けて描き出した。その厳しく力強い文章は、彼らが目撃した恐怖を読者の心に呼び起こした。

完全な無秩序状態が一〇日間も続いている。恐ろしい情景の前で耐えていなければならないこと……まさに地上の地獄だ。最も貧しい人々の最後の持ち物まで奪い尽くされる。貧者の最後の硬貨、最後の粗末な寝具（凍てつくような気候の中で）、貧しい車夫は人力車を奪われる。それを目にしたがら、ただ立っていないなければならないのだ。避難所を求めて来た何千人もの武装解除した兵士たちと、何百人もの無関係な民間人が連れ出され、目の前で射殺され、あるいは銃剣の

練習台にされる。その、彼らを殺害する銃声を聞かなければならない。何千人もの女性たちが目の前で跪き、狂ったように泣き叫び、彼女らを餌食にしようと狙っている畜生どもから救つてくれるよう懇願している。国旗が引き摺り下ろされ侮辱される、一回ではなく一〇回以上も。その前で何もできずに耐えていなければならぬ。そして、家庭が略奪され、愛してきた都市と自分の最高のものを捧げようとしてきた協会の建物が、組織的な放火によつて燃え落ちていくのを凝視している。これは、私が今まで目にしたことのない地獄だ。

(ジョージ・フィッチ、一九三七年二月二四日)

語ろうとするだけで恐ろしくなる話だ。どこで始まったのかも、どこで終わるのかも分からぬ。このような残忍性は聞いたことも読んだこともない。強姦、強姦！ 少なくとも夜に千件、そして昼にも多く発生していると思われる。抵抗した場合、あるいは少しでも拒否の姿勢が感じられた場合には、銃剣の一撃と銃弾である。一日に何百もの事件を書き並べることができる。人々は狂乱状態になつている。我々外国人に出会ふや、跪き、「叩頭」して、救いを請う。兵士と疑われたものは、いや、そうでないものでも、市の外に連れ出され、百人単位で、いや千人単位で射ち殺される。ある難民センターでは、最も貧しい難民までもが繰り返し、繰り返し、強奪され、最後の一文も、ほとんど最後の衣料や寝具をも失つている……朝も昼も夕も、毎日、女たちが誘拐されていく。

(ジョン・マツカラム、一九三七年二月一九日)

これらの恐ろしい事件については、いやというほど話してきたと思う。何十万もの事件がある。あまりの数に、心が鈍感になつて驚くこともなくなりそうだ。このような残忍な人間が現代の世界にいたるとは想像もしていなかった……切り裂きジャックのようなわずかな狂った人間だけがこんなことをすると思つていた。

(ジョン・ギレスピー・マギー、一九三八年一月二八日)

日本人の乱行の生々しい描写は、安全区では、日記だけでなく、手紙や回覧記事にも書かれ、謄写版印刷され、あるいはタイプライターで何度も何度も打ち直されたので、友人、親戚、政府職員、さらに新聞社はみなそれを受け取ることができた。虐殺を描写する記事を発信するとき、安全区の指導者たちは、委員会の個々のメンバーが報復を受けたり追放されたりすることを危惧して、しばしば受取人に、文献を公開する場合には作者を明らかにしないよう頼んだ。「この手紙が公開された場合、我々が南京から追い出される可能性があるのです、くれぐれもその取り扱いは慎重に行ってください。そんなことになれば、南京の中国人には恐ろしい結果が待っているのです」。マギーは家族に書いています。彼は説明した。日本人は「大いに喜んで」外国人が去っていくことを許すが、誰にも戻ってくることを許さない。安全区の指導者たちの忍耐、骨身を削る勤勞、そして注意深さは、最後には報われた。最初にジョージ・フィッチの日記が南京の外に持ち出され、上海で「センセーション」を巻き起こした。彼の文章は他の人のそれとともに（多くの場合、重要な名前は伏せられていた）、素早く「タイム」、「リーダーズ・ダイジェスト」、あるいは「ファー・イースタン」などの雑誌に印刷されて行き渡り、アメリカ人の読者の憤激を喚起した。一部は、「マンチェスター・ガーディアン」紙のハロルド・ジョン・ティンパリー記

者の Japanese Terror in China (1938) (中国における日本の暴虐) や徐淑希の Document of the Nanking Safety Zone (1939) (南京安全区の記録) などの書物の中に再登場した。

ときに安全区の指導者は、読者の気持ちを緊張させるために、彼らの文献に警告の前文を書いた。「私が語ろうとしているものは、楽しい話ではありません。事実、これは非常に不快な話なので、気の弱い方には読むことをお勧めできません」。フィッチは出版される日記の前に書いた。「これはほとんど信じがたい犯罪と恐怖の話です。これは信じられないほど残忍な、墮落した犯罪者集団の、平和で優しく、遵法的な人々に対する破壊行為の物語です。……私は、近代史の中にこれに匹敵するものはないと信じます」。

彼らが予想した通り、安全区の指導者の報告は多くのアメリカ人の懐疑を掻き立てた。「リーダーズ・ダイジェスト」に「The Sack of Nanking (南京の略奪)」という記事が掲載されたとき、一人の購読者が書いた。「見え透いたひどいプロパガンダ、前の戦争で人々に語られていた古い材料が詰まった極度の懐古趣味。このようなものを信じる人がいるとは到底考えられない」。他の購読者からも同じような感想が寄せられた。しかし、「リーダーズ・ダイジェスト」の編集者は、これらの話は真実であると主張した。それらの信憑性を確保するために、編集者は「相当の骨折り」をして、安全区の指導者からの手紙をさらに収集して、一九三八年の一〇月号に掲載した。編集者は追記した。「我々が入手している資料は、この雑誌全体を埋め尽くすだけの量があり、すべてがここに掲載する典型的な抜粋の部分と符合している」。

幸運なことに、南京での犯罪行為は文章だけではなく、映画フィルムでも記録されていたので、否定することはほとんど不可能になった。家庭用の映画カメラをもっていたジョン・マギーは、南京大学病

院で寝たきりになっている何人かの被害者たちを撮影した。それは、日本人に生きたまま焼かれて、恐ろしいほどに焦げて変形した男たち、頭部に激しい銃剣の刺し傷を追ったホロー器具店の店員（入院後六日経った後でも、脳の脈動を鮮明に見ることができた）、日本兵に輪姦され、首を斬り落されかけた被害者などの、忘れられないような映像だった。

結局、ジョージ・フィッチは自らの命を危険にさらしてフィルムを中国の外に持ち出した。一月一日に、南京を離れる許可を得た彼は、日本の軍用列車の「想像もできないほど、兵士が混み合った、不快な」三等座席に座って上海に向かった。彼の駱駝毛のコートの裏地には、南京大虐殺を撮影した八巻の一六ミリフィルムが縫い付けてあった。後に彼が家族に語っているように、彼は検査されてそれが見つかったら即座に殺されるだろうと覚悟していた。しかし、幸運にもフィッチはそれを上海まで運ぶことができた、ネガをコダックの事務所に持ち込んで現像し、四組の映画を作製した。その一つは、南京を去ってドイツに帰る前のナチ党指導者ジョン・ラーベに渡された。残りはアメリカ合衆国にたどり着き、フィッチや他の宣教師が宗教的な集会や政治的な集会で講義をするときに上映された。フィルムのいくつかのコマは印刷されて雑誌「ライフ」のページに掲載された。後に、映像の一部分は、フランク・キャブラのドキュメンタリー映画「なぜ我々は戦うのか—中国の戦い (Why We Fight: Battle of China)」に挿入された。さらに、数十年後の一九九〇年代に公開された二つの歴史ドキュメント映画 *Magee's Testament* (マギーの証言) と *In the Name of the Emperor* (天皇の名において) でも、この映像が使用されている。

日本の残虐行為の文章による記事のほかに、写真や映画フィルムまでが世界中のメディアに行き渡ったときの日本軍の憤懣がどれほどのものだったのかは、想像するしかない。ほとんどの安全区指導者た

ちは継続的な恐怖感を感じながら生活していた。もしことが発覚せずによりおおせるのなら、日本人は全員を殺すだろうと信じていた。ある人は自分の家にバリケードを築き、暗くなつてからは、二人か三人で組を作らない限り外には出なかつた。少なくともジョージ・フィッチは、自分の首に賞金がかかけられているのではないかと疑つていた。しかし、彼らは不安を押し、夜間に安全区の重要地域の警備を継続し、日本の残虐行為を公表し続けた。一九三八年一月二八日に、ジョン・マギーは書いています。「我々は日本軍の所業を世界に知らせるので、彼らは我々を敵以上に憎んでいる。我々はみな、誰も殺されていけないことに驚いているし、今後も我々が安全でいられるかどうかは、まだ分からない」。